

Field Study SDGs 1 評価 (総合的な探究の時間 × STEAM)

関西学院千里国際中高等部 米田 謙三

生徒数	300名	教員数	45名
箕面市は、1956年に府下 24 番目の市となり、以後 40 年の間に人口は 12 万 5000 人に増加、自然に恵まれた住宅都市として発展している。本校は 1991 年に創設され、2010 年に関西学院となった。創立当初から探究活動に力を入れており、併設のインターナショナルスクールとともに 1 つのキャンパスに帰国生徒、一般生徒、外国籍生徒が 3 分の 1 ずつ在籍し、多文化教育を実践している。春・秋・冬の 3 学期で構成され、多くの授業は 1 学期で教科内容が完結するプログラムであり、自分の進路や興味に合わせて時間割を自分で組むシステムになっている。1 クラスの授業は 24 人以下で行われ、高等部は、ほとんどの授業で学年の異なる生徒と一緒に学び、様々な形でディスカッションや実験・実習を取り入れたアクティブ・ラーニング型授業がおこなわれている。			



ルーブリックについて

P4 参照

- 中央教育審議会 教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」の課題の克服を第一に考えた。
- 学期末や学年末などの事後での評価に終始してしまうことが多く、評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない
 - 現行の「関心・意欲・態度」の観点について、挙手の回数や毎時間ノートをとっているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭できていない
 - 教師によって評価の方針が異なり、学習改善につなげにくい
 - 教師が評価のための「記録」に労力を割かれて、指導に注力できない
 - 相当な労力をかけて記述した指導要録が、次の学年や学校段階において十分に活用されていない

評価手法を適用した実践紹介

今回は特に 11 年生(高校 2 年生) の取組について取り上げる。この 2 つの科目の最終的な個人の課題目的は研究デザインシ

ートとポスターを作成し、全員がポスターセッション(質疑応答含む)を実践することだ。

11年生

春学期(1学期) Field studies

目的: 生徒自身の興味に基づいた専門的知識を深める。学ぶこと、知ることの楽しさに気づく。

自分の興味に基づいて、フィールドスタディ(以下: FS)に!!

事前の準備やFS中の活動を通して、基礎力、実践力、人間力を育成する。

内容: 春学期を通してひとつのテーマにそって探究活動をおこなう。FSの分野を活かしたトピックを選択する。

夏休みを使い、さまざまな施設・研究機関へ調査に行き、自分のトピックを理解し、

リサーチクエスト(以下 RQ)の組み立てに必要な情報を収集する。適切な情報を収集し、正しく保存する。

秋学期(2学期) Research design

目的: 専門分野の知識をさらに深め、事前研究、RQ、研究計画を発表する。

その活動を通して、主体的かつ自立的に学習する姿勢を育む。

内容: 研究手法、RQの立て方などについて学ぶ。

自分で実際に研究をおこない、「デザインシート」を作成して11月のPresentation Dayにてポスター発表をおこなう。

12年生

秋学期(2学期) 卒業プロジェクト 企画

目的: 最終的なアウトプットを発表する計画をたてる。

内容: 例えば、研究計画に基づき、論文を完成させる。関連するプロジェクトを企画する。

冬学期(3学期) 卒業プロジェクト 実施

目的: 最終的なアウトプットを発表する。

内容: 例えば、研究計画に基づき、論文を発表する。関連するプロジェクトを実行する。

基礎、実践、人間力の総仕上げの位置づけとする。

生徒の変容

生徒自身の「なぜ?」を大切に、考えることを重視する探究型の学びから特に下記の変容があったと考える。

- 現代社会の成り立ちを理解するための幅広い知識と深い洞察力(人文科学の幅広い知識やそれを用いて現代社会を深く理解する力)を身に付けた。
- 実社会に必要な高度な技能(情報を集め、活用する力、批判的に考える力、問題を解決する力、議論する力、創造力、他者と協力する力)を身に付けた。
- 「現代社会を生きる市民」としての意識と責任感(社会の課題・多様性・相互依存関係を認識し、市民として社会に積極的に参加する意欲や責任感)を身に付けた。
- 大学などの高等教育に対応できる基本的技能・姿勢(授業への積極的参加、自己管理能力、自己分析力、学習に対する自律心など)を身に付けた。
- 実社会に必要なスキル(ディベート、討論、プレゼンテーション、レポート・小論文作成、エッセー(小論文)作成など)をしっかりと習得した。
- グループワークやプロジェクト学習を通して、生徒同士が「協力し、互いに学び合う、高め合う」姿勢を育むことができた。
- 地球市民としての責任感や幅広い視野を身につけた。
- BYODや貸し出しされるデバイスやデジタル教材などを効果的に活用ができた。

実践を通しての考察、発見、感想

今回改めて次の4つの観点の評価を中心に組み込んだ1「診断的評価」2「形成的評価」3「総括的評価」(評定)学びの評価4「学習者としての評価」そして特に対話的で深い学びの思考過程(内的な過程)について考えた。結果として観察して、見取ること(形成的に評価すること)が大切である。

また得点化・数値化の難しさそして生徒の自己評価をそのまま反映させることも問題もあるということをもとに今回のようなルーブリックを作成した。ルーブリックを使ってできるだけ適切に評価して、フィードバックすることにも重点を置くようにした。複数の教員で担当しているためまた複数のプロジェクトがあるためもちろんそれぞれのグループである程度のアレンジも認め生徒たちにもあらかじめそのあたりを伝えておくことによってうまく機能した。

感想: 今回のテーマの一つでもある「観点別評価」は、新課程でも注目されており、各校・各先生が悩まれている。改めて、なぜ今「観点別」評価なのだろうか? 一番悩んだのは、それが生徒の学び方改革を意味するのか、先生の授業改革を意味するのか、という点だ。(もちろんそれ以外にも意味はあることはわかっているが) 観点別評価が導入されることで、最後は生徒の学びが変わることはもちろんだ。しかし、直接的にそこを目指しているのか、先生の授業変革を挟んだ上でそこを目指しているのかが考えたポイントである。もしも後者だとすると、授業改善をどう進めるかをセットで議論しないと全く意味がない。つい評価手法の議論になりがちだが、併せて授業デザインをどう変えているかも抑えることがあらためて大切にと今回感じた。

最後に今後の課題

①知識技能 or 思考判断表現 or 学びに向かう力ごとに考えるとどうなる? 議論としては「評価はどこまでできるのか」「評価すべきことは何か」

②フィードバックが大切なのは当然であるが、そのための「見取り」をどう考えるべきなのか・・・

評価手法開発にあたり参考にした文献・書籍・教材

- ・「CNN English Express Workbook」朝日出版社
- ・未来科準備室(2020)『もし「未来」という教科があったなら』学事出版
- ・「東洋経済 ACADEMIC SDGs に取り組む 小・中・高校特集」東洋経済新報社
- ・UNESCO(2021年1月現在) UNESCO and Sustainable Development Goals
<https://en.unesco.org/sustainabledevelopmentgoals>

問い合わせ先

学校名

氏名

電話番号

住所

メールアドレス

関西学院千里国際中高等部

米田 謙三

072-707-5050

大阪府箕面市小野原西4-4-16

kenzoo@cd5.so-net.ne.jp

研究デザインシート作成における目標							
	Field studies (今学期の科目)		FSの分野を生かしたトピックを選択する。				
			自分のトピックを理解し、リサーチエスチョンの組み立てに必要な情報を収集する。				
			適切な情報を収集し、正しく保存する。				
	Research design (次の学期の科目)		明確なリサーチエスチョンを立てる				
			リサーチエスチョンに関連する様々な観点の情報源から、適切な資料を収集し、それらを解釈する。				
			リサーチエスチョンの解決に必要な調査計画を立てる。				
			収集した資料に基づき、研究課題に対して理路整然とした章立てを作成する。				
	共通到達点		課題の意味を理解し、形式に則ったレポートを作成する。→ ポスター発表				
学習ループリック形式							
	3	2	1	0			
	字数、トピック数その他、全て形式に則っている。 論文の内容に合致した図やグラフなどを適切な箇所に用い、適切な方法でまとめている。	一部において、字数、トピック数その他、形式に則っていないところがある。 一部において、図やグラフなどの用いられ方が、論文の内容に合致していない、または適切な方法でないところがある。	かなりの部分において、字数、トピック数その他の形式に則っていない。 かなりの部分において、図やグラフなどの用いられ方が、論文の内容に合致していない、または適切な方法でないところがある。	書いていない			
0	テーマ (F.S.)						
	3	2	1	0			
	所属するFSに関するテーマ(分野・教科)を選択している。 研究するに適切なトピック(事象)を選択している。 テーマをよく理解した上で、トピックを選択している。	右の3つの事項のうち、2つまでできている。	右の3つの事項のうち、1つまでできている。	書いていない			
I	リサーチエスチョン (R.D.)						
	5-4	3-2	1	0			
	自分の選択したテーマ・トピックに関連した、的を絞った、かつ深まりのあるRQを立てている。 社会背景、先行研究、調査計画との整合性が取れたRQになっている。	自分の選択したテーマ・トピックに関連した、的を絞ったRQを立てている。 社会背景、先行研究、調査計画とある程度、整合性が取れたRQになっている。	自分の選択したテーマ・トピックに関連したRQを立てている。 社会背景、先行研究、調査計画との整合性を意識したRQになっている。	書いていない			
III	研究目的・意義						
	3	2	1	0			
FS	RQを立てるに先立ち、この研究で明らかにしたいことが見えている。 研究テーマを選んだきっかけを体験を交えて論理的な文章にまとめている。	RQを立てるに先立ち、この研究で明らかにしたいことがある程度見えている。 研究テーマを選んだきっかけを体験を交えて文章にまとめている。	この研究で明らかにしたいことが曖昧である。 研究テーマを選んだきっかけを文章にまとめきっていない。	書いていない			
IV	社会背景・基礎情報 (F.S.)			0			
	5-4	3-2	1	0			
	8-7	6-5	4-3	2-1	0		
	自分のトピックに対する社会背景や基礎情報に対する情報を明確かつ十分に示している。 収集した情報を理路整然と文章にまとめている。 章段の区分けも適切で、かつタイトルが端的に内容を示している。 信頼できる情報源から引用されており、かつ正しい引用の表記ができています。	自分のトピックに対する社会背景や基礎情報に対する情報を適切に収集している。 収集した情報がある程度論理的な文章にまとめている。 章段の区分けを行い、タイトルがある程度内容を示している。 引用の方法を理解し、正しい表記ができています。	自分のトピックに対する社会背景や基礎情報に対する情報がある程度収集している。 収集した情報を文章にまとめている。 章段の区分けを行い、タイトルをつけている。 引用の方法を理解し、正しい表記ができています。	十分ではないが、自分のトピックに対する社会背景や基礎情報に対する情報収集を行っている。 収集した情報を文章にまとめている。 章段に分けて入るが、適切とは言えない。 引用の方法を理解し、ある程度正しい表記ができています。	書いていない		
引用文献・参考文献							
	3	2	1	0			
	* 正しい表記である。 * 十分な件数である。 * 図書やweb情報など情報sourceに偏りが無い	左の条件のうち2つ以上満たしている。	左の条件のうち1つ以上満たしている。	書いていない			